

令和7年度普及活動成果集



共に歩み、切り拓く京築農業の未来

 福岡県京築普及指導センター

令和8年3月

表紙写真の説明

イチゴの栽培支援

小学生への食育授業

キクの栽培支援

はじめに

京築地域の農業者並びに関係機関の皆様には、日頃より普及指導センターの活動にご理解とご協力をいただき、感謝申し上げます。

令和7年度は、局地的な降雨や低夜温の影響で水稻の収量は確保できたものの、例年よりも早い6月下旬の梅雨明けに加え10月中旬まで続いた高温や乾燥により、豊前・築上地域を中心に農作物の収量や品質が低下しました。

このような気候変動の影響は、前年から顕著になっていることから普及指導センターでは、本年度から気候変動の影響を緩和するための対策に取り組んでおり、管内の農業者や関係機関の皆様のご協力をいただき、麦やホオズキ、イチゴなどの主要品目で影響緩和のための技術を確立してまいりました。

また、農業者の高齢化や減少により、これまで地域農業を支えてきた集落営農組織を担うオペレーター等の不足も深刻であることから、人材確保を懸念する集落営農組織と課題解決のための意見交換を重ねてきました。

このほか、昨年度整備した就農希望者が国の就農準備資金を受給しながら栽培技術を学ぶことができる研修体制（トレーニングファーム）についてもJAや各市町、農業委員会と連携し、受入審査等の適正化を図ってきたところであります。

本書では、上記の取組に加え、管内の主要な品目が抱える生産上の課題解決に向けた取組を普及活動の成果として取りまとめております。ご一読いただければ幸甚に存じます。

現地には、さらに多くの問題が山積しておりますが、普及指導センターは常に前を見据えて、一つでも多くの課題を解決し、稼げる農業の実現を支援してまいります。

引き続き、普及活動へのご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和8年3月

行橋農林事務所 京築普及指導センター

センター長 橋本 一郎

目次

はじめに
目次

1 普及活動の主な成果

気候変動に対応した安定生産技術の確立	1
次世代を担う新たな担い手の確保・育成	2
集落営農組織の次世代を担う「人財」の育成	3
ICTを活用したイチゴ担い手の技術力向上と新規栽培者の支援体制の構築	4
果樹の担い手機能を持った組織の育成	5
ケイトウの生産振興	6
畜産経営の安定化	7

2 管内の動き（トピックス）

.....	8
-------	---

3 普及指導員調査研究結果の概要

.....	10
-------	----

4 現地実証・展示ほ結果の概要

.....	11
-------	----

5 各種表彰の紹介（国、県）

.....	12
-------	----

6 参考資料

(1) 令和7年の気象および農業生産の概要	15
(2) 現地活動情報一覧	19
(3) 普及指導センターの活動体制	21

気候変動に対応した安定生産技術の確立

■課題化の背景

近年、観測記録を超える高温や豪雨などの気候変動が頻発しており、水稻や麦、大豆をはじめ果樹や野菜などの収量や品質の低下が問題となっています。

そこで、生産安定を図るため、気候変動の影響緩和技術や適応技術を速やかに確立するよう取り組みました。



コムギ黄斑病の激発現場

■活動内容

1 環境に対応した技術対策の確立

気候変動の影響を受けた水稻やイチゴ、イチジクなど16品目を対象とし、JAや農林試、専技などと影響緩和・適応技術について事前検討した上で現地実証を行いました。

2 影響緩和・適応技術の普及拡大

麦の病害対策やケイトウの一斉収穫法といった前年度までに影響緩和・適応技術を確立できていた品目については技術導入講習会を開催し、普及拡大を図りました。

また、導入農家から技術に対する評価を聴取しました。

3 モデル農業経営体の導入効果検証

導入農家の中からモデル農業者を選定し、収量や品質に加え、新たな技術導入に必要な経費や労働費を調査し、効果を検証しました。



現地実証ほ設置



イチゴ2番花の不揃い



成果報告会の開催

■主な成果

1 環境に対応した技術対策の確立

実証結果を踏まえ、麦、ケイトウに続き、ナス、スイートコーン、イチゴなど新たに7品目で効果が期待できる影響緩和・適応技術を確立し、管内の農業者に成果を報告しました。

2 影響緩和・適応技術の普及拡大

麦では4割、ケイトウでは6割の農家で、適応技術の導入効果が認められました。

3 モデル農業経営体の導入効果検証

調査の結果、モデル農業経営体において、麦では6割の増益効果、ケイトウでは収穫労働時間8割の削減効果が認められました。

■今後の取組

今後も、気候変動の影響を緩和することが可能な技術を確立していくとともに、効果が認められた技術は、速やかに普及拡大していきます。

(地域振興課、園芸畜産課)

次世代を担う新たな担い手の確保・育成

■課題化の背景

農業者の高齢化による担い手の減少が、全国的に深刻な問題となっています。京築地域も担い手の減少が問題となる中、産地や農村の維持・発展のため、関係機関一体となった就農支援体制の強化に取り組みました。

■活動内容

1 新規就農者の確保

令和6年に設立した就農準備資金を受給可能な県認定研修機関（以下、準備型研修機関）の運営会議を開催し、研修生の選考方法の適正化を検討しました。

管内関係機関で組織する京築地域農業・農村活性化協議会担い手部会で、就農相談体制の見直しについて協議しました。

2 新規就農者の定着促進

就農後5年以内の新規就農者を対象に、ベテラン農業者との交流と営農意欲向上を目的とした「新規就農者のつどい」を開催し、就農者の定着促進を図りました。

また、新規就農者を対象に、農業機械研修やパソコン簿記等の内容で「営農基礎講座」を開催し、栽培や経営の基礎技術習得を図りました。

■主な成果

1 新規就農者の確保

準備型研修機関で本研修を受講する前に、研修希望者の適性を判断するため、研修生選考方法にプレ研修を追加しました。また、関係機関がワンストップで就農希望者の相談に対応できる体制を整備しました。

2 新規就農者の定着促進

「新規就農者のつどい」や「営農基礎講座」などの研修会開催や個別巡回指導により、新規就農者の経営目標達成を支援した結果、3名中2名が販売額や規模拡大等の目標を達成しました。



新規就農者のつどい



営農基礎講座

■今後の取組

今後も、さらに就農支援体制の充実を図り、新規就農者の確保を促進するとともに、経営力向上に向けた支援を行っていきます。

(地域振興課、園芸畜産課)

集落営農組織の次世代を担う「人財」の育成

■課題化の背景

京築管内には水田農業の主要な担い手である集落営農組織が93組織ありますが、役員やオペレータが高齢化しており、人材確保や今後の組織運営が深刻な課題となっています。

このため、管内のオペレータ等の人材確保が課題となっている集落営農組織を対象に、関係機関と連携し、各組織の支援方針を明確にした上で、意見交換を行うことで新たな人材の確保を支援しました。

■活動内容

集落営農組織の人材確保に関するビジョン・支援方針作成に向け、関係機関との会議で各集落営農組織への支援方針の検討を実施しました。

また、関係機関と共に集落営農組織への聞き取り巡回を実施して課題の掘り起こしと支援方針の作成を行いました。

作成したビジョン・支援方針に基づき、集落組織との意見交換を実施して組織の人材確保を目指しました。

■主な成果

91組織で支援方針を作成するとともに、他組織の人材確保に関するモデル事例の紹介や現状把握のための見える化などの取組を通じて13組織で営農継続のための新たな人材を確保することができました。

■今後の取組

作成したビジョン・支援方針に基づき、各集落営農組織に支援を実施し、組織内外からの担い手確保等に向けた取組支援を継続していきます。



集落営農組織での意見交換会

集落営農の今後の在り方を検討しましょう



集落営農組織巡回時に使用したチラシ

(地域振興課 水田農業係)

ICTを活用したイチゴ担い手の技術力向上と 新規栽培者の支援体制の構築

■課題化の背景

J A福岡京築いちご部会では、出荷量や作付面積の減少等の課題がある一方、CO₂発生装置や自動換気装置といった機器を導入し、県内でも高レベルな収量を確保する生産者もできています。また、近年、1～2名程度の新規就農者がイチゴ経営を開始しています。

そこで、高収量者のハウス内環境データを測定機器を活用し、データを共有するとともに、個別指導の強化により新規栽培者の栽培技術向上を支援しました。

■活動内容

1 ICTを活用した生産者の技術力向上

収量向上に意欲のある生産者に対して、管内の高収量者とのハウス内環境の違いを見える化する現地実証を行い、環境測定装置の必要性について説明し、導入を図りました。

その後、導入した農家を対象にハウス内環境データや生育データを共有し、研修会や意見交換会の場を設け、収量が向上するよう支援を行いました。

2 新規栽培者の支援

関係機関と連携し新規栽培者の支援体制を構築し、栽培希望者と面談を行い、新規栽培者の確保を行いました。併せて、新規栽培者の早期技術習得に向けて個別巡回指導や講習会を行いました。

■主な成果

1 ICTを活用した生産者の技術力向上

ICTの導入推進を図ったことで、環境測定装置導入農家数は3戸（R4）から14戸（R7）に増加しました。併せて、現地巡回や環境測定装置導入農家を対象には場の互評会や研修会等を実施したことにより、設置している担い手農家の平均単収は、部会平均単収を大きく上回る約4.5t/10aとなりました。

2 新規栽培者の支援

新規栽培者を確保するため、希望者と面談を行い、令和5年度からの3か年で新たに6名の栽培者を確保しました。また、個別巡回指導等を通じた厳寒期を乗り切る株づくりの指導により、県平均単収以上の収穫量を確保できました。

■今後の取組

普及指導センターでは、今後も産地の維持や担い手の経営安定に向け、技術力向上の支援を行っていきます。



導入された環境測定機器

(園芸畜産課 野菜係)

果樹の担い手機能を持った組織の育成

■課題化の背景

行橋市の新田原地区はイチジクやモモ、ナシなどの果樹産地ですが、生産者の高齢化による担い手不足が問題となっていました。

J A福岡京築新田原果樹部会は、産地を守っていくため、農作業を受託するサポート部を前身として、園地の借り受けを可能とする「株式会社ふるさぼ新田原（以下、ふるさぼ）」を令和5年に設立しました。普及センターでは、ふるさぼの経営の早期安定と事業の発展を目指し、支援を行いました。

■活動内容

1 トレーニングファーム整備と新規就農者の確保・育成

果樹栽培に携わりながら技術習得ができるトレーニングファームを整備するため、ふるさぼや関係機関と協議を行いました。また、新規就農希望者掘り起こしのため、ふるさぼ独自の就農相談会を開催しました。

2 園地流動化の促進

果樹部会員を対象に営農意向を調査し、園地情報の整理と関係者間での共有を行いました。

3 作業受託の拡大

社労士や中小企業診断士などの専門家派遣により、就業規則の策定と雇用体制の整備を行うとともに、経営安定に向けた事業計画の再確認を行いました。

■主な成果

1 トレーニングファーム整備と新規就農者の確保・育成

ふるさぼが農地29aを借り受け、補助事業を活用してトレーニングファームを整備しました。当園地は、準備型研修機関としても登録されました。また、新規就農者の技術習得の場として、トレーニングファームで講習会を開催することが可能となりました。

2 園地流動化の促進

意向調査により、廃園見込み園地の早期把握が可能となり、法人の借り受けまたは希望者への譲渡・貸借協議を円滑に進めることができました。

3 作業受託の拡大

雇用体制が整備されたことで、部会員や地域外の人材を作業者として登録し、農作業受託の人員確保につながりました。



新規就農者向け講習会（トレーニングファームにて）



専門家派遣

■今後の取組

新田原地区の果樹産地を守っていくため、ふるさぼの取組を引き続き支援していきます。

（園芸畜産課 果樹係）

ケイトウの生産振興

■課題化の背景

京築地域ではケイトウの生産が盛んであり、県内一の産地です。令和6年度には収穫作業の省力化を目的にヘッジトリマーを用いた一斉収穫技術を確立しました。

一方で、定植作業は腰を下ろした姿勢のまま全て手作業で行う上、高温下の作業となるため身体的負担が大きく、規模拡大に向けた課題となっていました。

そこで、定植作業の省力化を目的として、半自動移植機を用いた機械定植技術の検討を行いました。

■活動内容

野菜用半自動移植機「ちどりさん」((有)沢田機工製)の改良版を用いた移植試験を実施し、作業の省力効果および定植方法による生育への影響について調査を行いました。

■主な成果

慣行の手植えと比べると、機械定植は多少作業時間を要するものの、立ち姿勢のまま作業を行うことができるため、身体的負担が大きく軽減されました。

また、苗の活着や初期生育に差は見られなかったことから、機械定植はケイトウの生育に影響を及ぼさないことが分かりました。

以上の結果より、機械定植は省力化という点で有用な技術だと考えられました。



改良型の半自動移植機



機械定植後の苗

■今後の取組

ケイトウの一斉収穫技術と併せて機械定植技術の導入を推進します。両技術の導入にあたっては生育の均一化が必要不可欠であることから、育苗や定植後管理について引き続き現地指導を徹底し、ケイトウ産地のさらなる発展を支援します。

(園芸畜産課 花き畜産係)

畜産経営の安定化

■課題化の背景

現在の畜産情勢は、国際的な飼料原料価格の上昇や肉用子牛価格の暴落等、大変激しい変化にさらされています。その中で、畜産経営を安定させるため、生産者毎の課題解決による事故廃用率の低下と繁殖成績の向上、低コスト飼料の確保と有効活用への支援が求められています。

■活動内容

酪農では、周産期を中心とする飼養管理の改善、自給飼料を適切に利用した飼料給与および定期的な繁殖検診を実施しました。また、繁殖成績向上を目的とした乾乳期間の短縮試験を実施しました。

肉用牛では、子牛の飼養環境改善により、事故廃用率の低減を図りました。

自給飼料生産においては、新たにWC S用稲の栽培に取り組む生産者への栽培技術支援や生産者間の連携支援により、新たな自給飼料生産利用体制の構築を図りました。

■主な成果

酪農では、定期的な繁殖検診の実施により繁殖成績が向上しています。

肉用牛においては、子牛飼養環境や衛生プログラムの改善を支援したことにより、子牛の事故廃用率は減少傾向にあります。

このほか、大型機械の導入により省力化された高糖分高消化性WC S用稲の栽培の取組や、自給粗飼料や子実用とうもろこしといった自給濃厚飼料の牛や鶏への有効利用等、新たに8か所の自給飼料の生産利用体制を構築しました。



定期的な繁殖検診



収穫されたWC S用稲

■今後の取組

引き続き関係機関と共に、各生産者の課題や方向性の把握と共有を進め、有効な改善提案を行うことで、畜産経営の安定化を図るとともに、新規就農者の支援を重点的に実施します。

(園芸畜産課花き畜産係、地域振興課水田農業係)

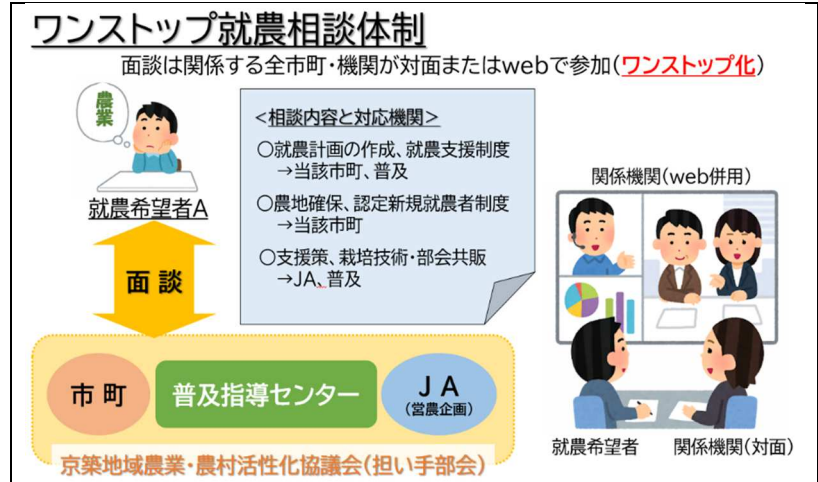
2 管内の動き（トピックス）

ワンストップ就農相談体制を整備

京築地域では、これまで管内の関係機関で組織する京築地域農業・農村活性化協議会担い手部会が主体となり「就農相談会 in 京築」を年1回開催してきましたが、相談機会が限られていることから、就農相談体制の見直しを行いました。

新たな体制では、普及指導センターが連携役となり、関係機関と就農相談内容の共有を徹底、面談時にもオンラインを活用し、関係機関が相談者からの質問や要望にワンストップで対応できる体制を整備しました。ワンストップ相談を受けた就農希望者からは、「関係機関それぞれに相談に行かなくて済み、助かった」といった声が聞かれています。

今後も、関係機関と連携し、就農相談者への支援を強化するとともに、新規就農者の確保・育成に努めます。



ワンストップ就農相談のイメージ

大豆新品種「ふくよかまる」への品種転換

管内の大豆は、栽培面積 760haと県内でも有数の産地です。しかし、播種が主に梅雨明け以降の7月中旬に行われるため、ほ場が強く乾燥した条件での播種となり出芽・生育不良による収量の低下が問題となっています。

そこで、県農林業総合試験場が開発した大豆新品種「ちくしB5号（ふくよかまる）」が早播き適性があることに着目し、令和6年度に本品種の現地実証を行いました。早播きした実証ほでは、主茎が低いものの最下着莢高が高く、大粒であることを確認しました。

7年度にはJA福岡京築大豆部会の理解と協力を得て「フクユタカ」から「ふくよかまる」に一斉転換し、さらに品種の特性を生かした6月下旬播種を推進しました。播種時期の前進化を進め初期生育の確保ができたことで収量の改善につながりました。

来年度以降も、部会と連携してさらなる収量向上対策に取り組んでいきます。



適期播種した大豆の収穫作業

■ みやこ4Hクラブが地域農産物のPR活動を実施

みやこ4Hクラブは行橋市、苅田町、みやこ町の若手農業者14名で構成され、農業技術や経営管理能力の向上、地域農産物のPR等を目的として活動しています。

今年度は、みやこ町産業祭のほか、ゆめタウン行橋や小倉井筒屋で行われたマルシェに出店し、クラブ員が生産した農産物の販売や消費者との交流を行いました。また、新たな取組として、県庁食の安全・地産地消課主催の「ふくおか農林漁業体験ツアー」で「ふくおか地産地消応援ファミリー」を受入れ、農業機械の操作体験や地域農産物を用いたBBQを実施しました。これらの取組は地域農産物や4Hクラブについて消費者に知ってもらうよい機会となり、農業や地産地消への関心向上に繋がりました。

次年度以降も、地域農産物のPRや消費者との交流ができるイベントの情報提供や取組支援を行うことで、クラブ員の生産意欲の向上を図るとともに、地産地消を推進していきます。



ふくおか農林漁業体験ツアーにおける農業機械体験の様子

■ 第三者継承で新規酪農家が経営をスタート

令和7年4月より第三者継承による新たな酪農家が誕生しました。その名は亦賀^{またが}牧場。みやこ町で就農し、現在40頭の経産牛を飼養しています。

牧場主の亦賀一裕さんは大学を卒業後、北海道の牧場に就職、8年間勤務した後、福岡県酪農ヘルパー組合に就職し、就農前の6年間勤務しました。

奥様の瑞枝さんとの出会いも、北海道の牧場に勤務されていた時の同僚だったとのこと。今は弟の健太さんも仲間に加わり、3人で牧場を経営しています。

今後の目標は、牛舎内を機械化・省力化し、労働力を軽減して、家族との大切な時間が作れるようにしたいとのこと。



亦賀一裕さん(右) 瑞枝さん(左)

課題名	結果の概要	部門	担当者
京築地域における新規就農者の計画達成状況及び要因調査	直近5か年の農業次世代人材投資資金（経営開始型）を受給した新規就農者の中には、販路の確保等が不明確な品目を選定し、経営が不安定となった事例が散見された。 このため、新規就農者でも経営を安定することが可能な品目の紹介資料をJAと連携し作成するとともに、関係機関が一体となってワンストップで就農相談に対応することが可能な体制を構築した。	地域	吉田 ○太田
水稲「夢つくし」における夏場の高温に対応した施肥体系の検討	夏季の高温時に対応する施肥体系を確立するため、肥効の長い緩効性肥料やドローンによる穂肥を検討した。本年は葉色が落ちず、緩効性肥料、穂肥ともに肥料効果は判然としなかった。	水田	古江
地域ぐるみで集落営農組織の今後を検討	6集落を巻き込んで地域農業を守るための検討委員会を設立した。その中で地主も巻き込んでの研修会を開催し危機感の醸成を図った。これにより、各集落の機械や人が不足している現状を可視化・共有することにつながり、集落ごとに異なっていた作業料金の統一ができた。6集落うち2組織については、集落を超えて共同作業を行い、地域の農業を守っていく連携体制の取組が始まった。	水田 + 地域	山内 竹本 ○野見山
イチゴ2番花房の安定誘導技術の検討	2番花房の分化誘導に効果が期待できる試作肥料を施用した結果、慣行肥料と比べ10月中下旬の肥料溶出が抑えられ、2花果房の分化が安定し、収穫時期も早くなった。	野菜	井上
ブロッコリーにおける保水性資材を活用した乾燥対策の効果検討	ほ場によって畝内施用は枯死率がバラついた。育苗培土混用は1調査地点ではあるが、枯死率が若干低下した。	野菜	田中
スイートコーンにおけるトンネル被覆資材および塗布資材による障害軽減効果の検討	散乱光フィルムや近赤外線の透過を遮断する塗布剤によるトンネル内の温度抑制効果はみとめられなかった。併せて、近年、25℃以上の夏日になることが多くなった4月上旬以降にトンネルの裾換気を行ったところ、生育障害の発生はなく、収量や品質を安定させることができた。	野菜	太田
カイガラムシ類の防除適期の検討	近年の気候変動によりウメシロカイガラムシの発生時期や年間の発生回数が従来より変化している可能性があることから、トラップを設置して、発生ピークを調査した。5月下旬～6月中旬に従来の発生時期より遅れて第1ピークが現れたが、それ以降のピークはなかった。	果樹	○豊福 中山
微生物資材を活用したホオズキの土壤病害対策	部会員6名を対象に、土壤病害の発生状況および土壤病害対策の実施状況について調査を行った。パチリス菌等を含有する微生物資材2種類の土壤灌注処理を4～6月の期間月1回行ったが、無処理区を含め土壤病害の発生が少なく、処理効果はわからなかった。上記の微生物資材は、実の着色を含め、地上部の生育に影響を及ぼさなかった。	花き	巢山
乾乳期間の短縮が乳牛の泌乳成績・繁殖成績に及ぼす影響	乾乳期間の短縮に伴う搾乳期間延長により、乾乳前出荷乳量は増加した。現時点（12月末）で、分娩後乳量は慣行と同等量が確保されており、最終的な分娩後乳量と繁殖成績に関しては今後継続調査となる。	畜産	堀田

品目	課題名	結果の概要	設置場所
水稲	水稲奨励品種決定現地調査	新系統「ちくし102号」と「ちくし105号」の中山間、平地地における現地栽培試験を行った。両系統とも対照の「夢つくし」と比べ出穂期及び成熟期が早かった。収量では「ちくし102号」が「夢つくし」と比べ高かった。食味では「ちくし105号」が「夢つくし」と比べ高かった。	豊前市 苅田町
水稲	夢つくしにおける再生二期作の収量性把握	県育成品種「夢つくし」の再生二期作における収量性を検討した。刈取高40cmと20cmで比較し、40cmの方が二期作目の収量を確保できることがわかった。	豊前市
麦	コムギ黄斑病の発生時期と防除効果の検討	令和6年産「チクゴイズミ」において、コムギ黄斑病が激発し、収量が100kg/10a以上の減収となったため、発生消長と防除効果の検討を行った。3月中旬頃から複数ほ場（前作に関係なく）で、コムギ黄斑病の発生が確認された。3月時点に病徴が見られたほ場で防除を実施することで罹病の進展を抑制することが確認できた。	上毛町
イチゴ	イチゴの1番果房の花芽分化技術の検討	普通促成作型の未分化定植を防止するため、株冷5型苗を出庫した後の予冷庫を活用し、7日程度低温処理する作型を試験導入。試験作型は、普通促成と比較して花芽のバラツキが少なく、果実の生育ステージならびに肥大も良好なため、年内の収量確保が可能となった。	みやこ町 築上町
夏秋ナス	夏秋ナスにおける酸素供給剤施用による高温期の乾燥対策効果の検討	栽培期間を通して、試験区毎に草勢や収量に差はみられず、草勢維持対策効果は判然としなかった。	みやこ町 築上町
アスパラガス	アスパラガスの高温障害対策の検討	熱線を反射できる遮光資材を、導入コストを考慮しハウス天井フィルムに基準濃度以下で塗布した。無施用区と比較し、昇温抑制効果や障害茎抑制効果は認められなかった。	豊前市
イチジク	ミスト散水によるイチジク高温障害対策の検討	イチジク「蓬萊柿」の小玉化、着色不良の一因が夜温の高温と予想されたことから、昼間の温度を下げて夜を迎えるため日中ミスト散水処理を行った。圃全体の温度抑制効果はあったが、果実品質については差がなく、小玉化、着色不良果の改善まで至らなかった。	行橋市
モモ	エスレル10散布によるモモの高温障害対策の検討	高温による障害果（しわ果・果肉褐変）の発生を防止するため、エスレル散布により生育をスムーズに進める処理を行った。本年度は障害果が発生しなかったが、晩生種における熟期促進効果が認められた。	行橋市
キウイフルーツ	キウイフルーツ「甘うい」における日焼け対策の検討	梅雨明け以降の高温・乾燥による日焼け果や早期落葉が多発しているため、棚上に遮光資材を設置し、日焼け果低減と早期落葉防止の効果を検討した。無処理と比べて葉焼けや落葉程度に差はなかったが、日焼け果は減少した。	行橋市
ケイトウ	移植機の活用によるケイトウ定植作業の省力化	省力化を目的として、ケイトウ苗の機械定植技術の検証を行った。慣行（手植え）と比べて定植時間は長くなったものの、身体的負担は大きく軽減され、省力化に繋がる有用な技術であることが明らかになった。	上毛町
ホオズキ	高温条件下におけるホオズキの着色向上技術の検討	実の着色促進剤「エスレル」に展着剤「アプローチBI」を加用もしくは散布量を1.5倍（75L/a）に増やすことにより、慣行区（展着剤無加用、散布量：50L/a）と比べ着色が優れる傾向が認められた。	みやこ町
ホオズキ	ホオズキの土壤病害対策技術の検討	パチリス菌等を含有する微生物資材2種類の土壤灌注処理を4～6月の期間月1回行った。無処理区を含め土壤病害の発生は少なく、処理効果はわからなかった。但し、上記の微生物資材は、実の着色を含め、地上部の生育に影響を及ぼさなかった。	築上町
キク	キクの頭上ミスト散水処理による開花遅延の軽減	9月開花作型において、輪ギク1品種、コギク2品種を供試し、梅雨明け以降、ミスト散水チューブを用いた頭上散水を夜明け前もしくは日没後に毎日30分間行った。夜明け前散水により、開花が無処理区に比べ1～3日早くなった。	築上町
酪農	吸血昆虫対策資材の実証	牛舎周辺の吸血昆虫（サシバエ）の牛舎への侵入防止及び廻廊に効果のある資材（ベルネット）を設置し、その効果を実証した。ネット設置用クリップを使用しネットを設置した結果、ネット設置を4時間程度で完了でき、設置後牛舎内サシバエ数の減少効果が確認された。	みやこ町

5 各種表彰の紹介（国、県）

表彰事業名・受賞名	受賞者氏名・組織名	市町村名
福岡県農業指導功労者表彰	中村 吉孝	みやこ町
令和7年度福岡県麦作共励会 集団の部 優良賞	河原田営農組合	豊前市
令和6年度福岡県大豆作経営改善共進会 農家の部 優良賞	下田 芳樹	築上町
第61回福岡県肉畜共進会 国産牛の部 銀賞	吉田 努	豊前市

※令和6年4月から7年2月の期間の表彰事業において表彰を受けた個人および組織

福岡県農業指導功労者表彰を受賞～みやこ町:中村吉孝氏



表彰される中村氏（写真右）

みやこ町で農園を経営する中村吉孝氏が、福岡県農業指導功労者表彰を受賞しました。

本表彰は、農業青年の育成確保活動等に熱心に取り組み、福岡県の農業の持続的な発展に大きく貢献した農業指導者を表彰するものです。

中村氏は、指導農業士として地域農業の発展に寄与されました。また、就農希望者を研修生として積極的に受け入れ、栽培指導のみならず、自ら開拓した販売ルートを活かしたマーケティング支援を行い、新

規就農者の育成に取り組みました。

このような、長年にわたる就農支援活動が評価され、受賞につながりました。

令和7年度福岡県麦作共励会で豊前市の河原田営農組合が優良賞を受賞

豊前市の河原田営農組合が、令和7年度福岡県麦作共励会集団の部で優良賞を受賞しました。本共励会は、麦の生産振興を図るため、生産技術や経営面に創意工夫を持ち、先進的で他の模範となる経営体を表彰する目的で毎年開催されています。



表彰される河原田営農代表の久保田氏（写真右）

河原田営農組合は、耕畜連携を活用した牛糞堆肥施用による土づくりの実施や排水対策（周囲溝・弾丸暗渠）の徹底、農薬散布用ドローンによる赤かび病防除に取り組み、収穫時の降雨が多い年でも、高収量・高品質な麦を生産しています。また、後継者も営農活動に参画させることで、人材育成に力を入れるなど、地域の農業振興に大きく貢献している点も評価されました。

5 各種表彰の紹介（国、県）

令和6年度福岡県大豆作経営改善共進会で築上町の下田芳樹氏が優良賞を受賞

良賞を受賞

築上町の下田芳樹氏が、福岡県大豆作経営改善共進会個人の部で優良賞を受賞しました。本共進会は、大豆の生産振興を図るため、生産技術及び経営改善の面から先進的で他の範となる経営体を表彰する目的で毎年開催されています。

同氏は、排水不良かつ地力が低い条件不利な圃場条件を克服するために、ほ場ローテーション（水稻-水稻-大豆）、排水対策の徹底、ペレット鶏糞を利用した追肥等に取り組むことで高収量・高品質を達成されました。また、営農支援システムを活用した作業の「見える化」によって無駄のない経営を実践し、さらに地域の農地の受け皿となって耕作放棄地を発生させない役割を果たしていることも評価されました。



表彰される下田氏（写真中央右）

吉田牧場が第61回福岡県肉畜共進会国産牛の部で銀賞受賞

令和7年10月に開催された第61回福岡県肉畜共進会（福岡県肉畜共進会主催：農林水産祭参加行事）国産牛の部で、豊前市の吉田牧場（吉田努氏）が銀賞を受賞しました。

この共進会は、年に一度、県内の畜産農家が肉畜の肥育技術と改良増殖の成果を競うもので、肉豚の部、和牛の部およびホルスタイン種及び交雑種からなる国産牛の部があります。

吉田牧場は第58回大会の金賞受賞以来の入賞で、牧場は5年に法人化し、吉田牧場株式会社として、吉田努氏から次世代の後継者に経営を移譲中です。また、自家生産牧草や稲WCS、地元産稲わら、県内で発生する食品副産物といった地域資源を有効に活用し、安全・安心・おいしい牛肉づくりに日々取り組んでいます。

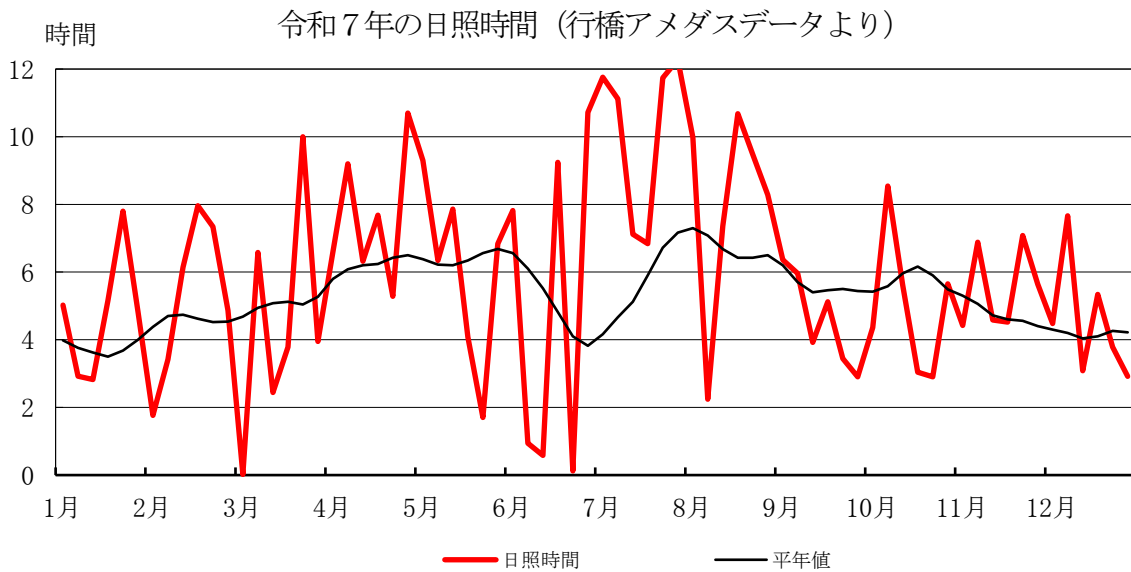
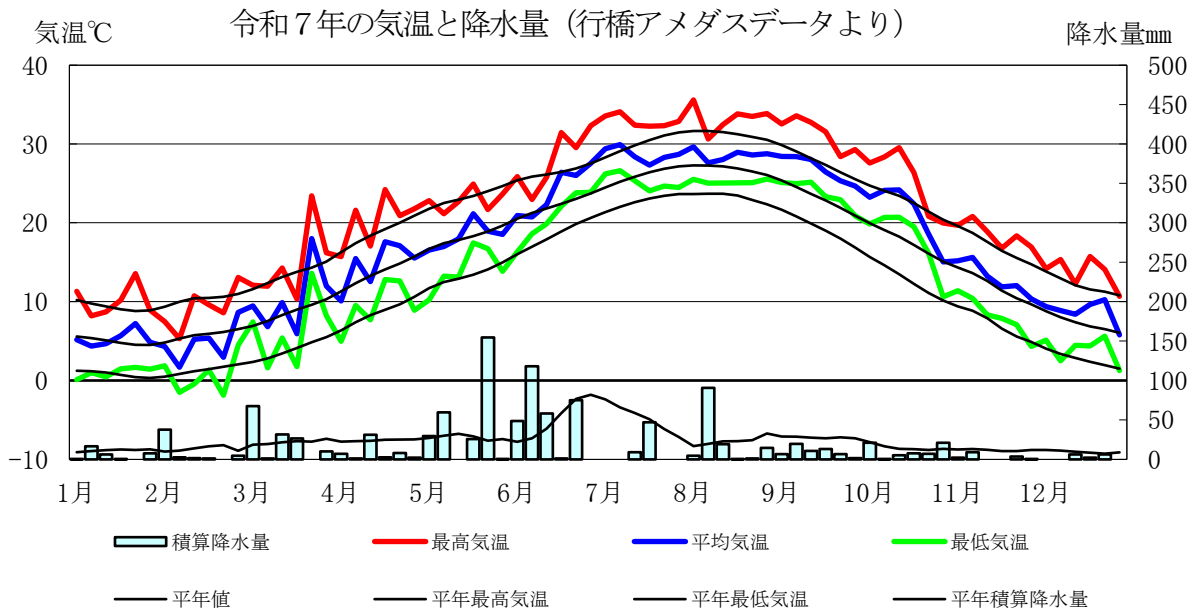


受賞を喜ぶ吉田牧場 吉田努氏 牛舎にて

(1) 令和7年の気象および農業生産の概要

■ 気象概況

1月～2月の平均気温は平年並か平年より低く、降水量は平年よりかなり少なかった。
 3月～4月の平均気温は平年より高く、降水量は平年より少なかった。
 5月～6月の平均気温は平年並か平年より高く、降水量は平年より多いか平年並となった。
 梅雨入りは5月16日頃（平年より19日早い）、梅雨明けは6月27日頃（平年より22日早い）となった。
 7月～10月の平均気温は平年よりかなり高かった。7月～10月の降水量は平年よりかなり少なかったが、8月10日に大雨があり、8月の降水量は平年よりかなり多かった。11月上・中旬の平均気温は平年より高かった。



6 参考資料

■ 主な品目の生産概要

普通作

○ 水稲

早期水稲の移植は4月10日から始まり、5月5日頃がピークであった。移植後は平年より気温が低かった影響で生育は遅れ気味となったが、7月の高温多照で生育は回復し、出穂期は前年並みに早かった。稈長及び穂長は平年より長く、穂数は多く、充実良好で収量は平年より多かった。品質では、白未熟粒の発生が例年より少なかった。

普通期水稲の移植は6月1日頃がピークとなった。移植後の生育は良好で、7月の高温多照で茎数が平年より多く、出穂期は前年並みに早かった。一部地域では7月の少雨により水源の川や池の水が干上がり、水不足となって水稲が著しい生育不良となった。その後、8月10日に大雨が降ったことで生育は回復した。出穂期以降は高温で経過し、成熟期は平年よりやや早く、穂長は平年より長く、穂数が多かった影響で、収量は平年より多かった。品質は、白未熟粒の発生が昨年より少なかった。

○ 麦（令和7年産）

播種は令和6年11月8日頃から始まり、12月上旬には約8割のほ場で播種が行われ、おおむね12月末までに終了した。

11月中旬までに播種されたほ場では、出芽良好で生育は順調だった。11月下旬以降に播種したほ場では、気温の低下と乾燥で出芽が遅れ、初期生育は不良となった。また、生育期間を通して気温が平年並みで経過したため、草丈は平年並み～やや短く、茎数は平年よりやや少なく、茎立ち期は平年並みであった。出穂期は3月下旬の低温で平年より4～7日程度遅かった。穂数は平年よりやや少ないが、穂長は平年並みとなった。5月中旬の降雨で一部倒伏が発生した。成熟期は平年より4～7日程度遅くなった。子実の充実が良好だったため収量は昨年より多かった。小麦については降雨の合間に収穫され、一部で穂発芽が発生した。

○ 大豆

早いところで6月21日頃から播種が始まり、7月に入ってから全域で播種が始まった。7月10日頃がピークとなり、7月下旬で播種が終了した。7月播種の大豆は乾燥害により出芽および初期生育が不良であった。8月10日頃の大雨の影響でごく一部地域のほ場が冠水し、湿害や枯死が発生した。開花期は平年より2～3日遅かった。8月上旬からオオタバコガやハスモンヨトウが発生した。9月下旬以降はカメムシ類が全域で多発し、一部で青立ちが発生した。平年より遅い10月末から落葉が始まり、収穫は11月10日から始まった。収量は平年に比べ少なく、子実の中粒が中心となった。

野菜

○ イチゴ

令和7年度産については、4月上旬までの低温と乾燥の影響によりランナーの発生は遅かったが、ランナーの発生本数は例年並であった。切り離し後からの高温の影響により生育の停滞や根量の少ない苗が見られた。早期作型の花芽分化は順調であったが、普通促成は花芽分化が遅かったため、定植は9月30日以降となった。定植以降も気温が高く推移したため、10月下旬まで2番果房の花芽分化を考慮した管理を行った。定植を遅らせたことで11月の出荷は少なく12月下旬にかけて出荷量が増加し、前年度産と比べると大玉比率は高くなった。病害については炭疽病の発生が散見され、ほ場によっては汚斑症状や枯死株が目立った。

○ レタス

育苗については、早期作型で曇天と降雨が続いたため徒長が見られたが、全体的に生育は順調であった。定植は、晴れ間を利用したほ場準備により、順調に行われた。定植後は定期的な降雨により活着、生育共に順調となり、収穫は10月中旬からスタートした。早期作型では、高温によりタコ足病の発生が見られた。出荷開始の規格は2L中心となった。病害虫については、9月中旬よりハスモンヨトウなどの被害が見られたが、防除の徹底により被害は少なかった。また、一部圃場で菌核病の発生が見られた。

○ スイートコーン

一部品種で播種後の低温により発芽不良が見られた。定植は概ね順調に行われたが、3月上中旬の降雨の影響により、2型と3型において定植が遅れた。生育期の気温は平年並みか平年より低い日が多かったため、全体的に短稈での出穂となり、出荷揃いは例年に比べ5日～7日程度遅くなった。また、3月下旬～4月下旬頃の乾燥等のストレスによる副房の発生や5月から梅雨時期までの多雨の影響で先端不稔の発生が見られた。出荷開始の規格は、2L中心となった。病害虫については、アワノメイガやアブラムシ類、カメムシ類の発生が見られた。一部圃場では倒伏細菌病の発生が見られた。

○ 夏秋なす

定植は4月下旬を中心に行われ、活着も良好であった。定植後の生育は、平年より温暖であったため順調であり、主枝の摘心も例年より早い8月上旬を中心に行われた。8月中旬の収穫最盛期後も、液肥および発根促進剤の葉面散布や葉数の確保により草勢が維持され、10月下旬の気温低下時まで収穫は続いた。病害虫については、7月は乾燥によりアザミウマ類とテントウムシダマシ類、8月上旬は豪雨後に褐色腐敗病、9月中旬からはうどんこ病が発生した。

果樹

○ イチジク

発芽はおおむね前年より1週間遅れ、収穫開始は10日遅れとなった。春季の低温・少雨の影響により全体的に小玉となった。9月中旬から気温が下がったことによりショウジョウバエ・さび病が発生した。

○ モモ

開花前に気温が下がったことで満開期は前年より7日程度遅く、収穫も昨年より7日ほど遅くなった。極早生・早生品種では、早い梅雨明けにより小玉傾向、中晩生品種は平年並みとなった。果実品質は糖度が高く良好であった。強風の日が多く、せん孔細菌病の発生が多かった。

○ キウイフルーツ

発芽～開花は前年より5日遅く進んだ。少雨による乾燥のため摘果が不十分だった園では小玉であったが、適正着果園では平年並みからやや大きい傾向となった。日焼け果の発生は前年より少なかった。夏季の高温・乾燥により葉枯れや枯死が発生した。

○ ナシ

満開期は昨年より5日ほど遅く、収穫も遅くなった。高温・乾燥の影響により早生～中生品種で小玉傾向であった。晩生品種で日焼け果が発生したものの、前年ほどではなかった。高温・乾燥に影響によりハダニが散見された。

○ カキ

満開期は前年よりやや遅く、生育もやや遅れ気味で進んだ。開花後の花卉のはずれが悪く灰色かび病発生が多くなった。生理落果は少なかったものの、夏期の高温・乾燥により日焼けが発生した。「秋王」では7月の天候不良で落果が発生した。収穫期になっても気温が下がらず、着色遅れ気味であったが、前年よりやや早い収穫開始となった。

6 参考資料

花き

○ ホオズキ

2月から3月中旬までの間、気温が平年より低く推移したため、萌芽が平年より1週間程度遅かった。また、4月の降水量が平年より少なく、草丈の伸長が劣ったことから、切り枝の最上位階級の割合が昨年より2割弱少なかった。加えて、全体的に切り枝の中段の実飛びが目立った。実の着色促進のためのエスレル処理は、7/10～15日頃に行われた。気温が平年よりかなり高く、降雨が少ない厳しい環境条件であったが、着色は概ね良好であった。病害については、斑点細菌病の発生は全体的に少なく、軟腐病の発生が一部のほ場で認められた。害虫については、春先にタバコノミハムシによる新葉の食害が、収穫期直前にハダニの被害が一部で認められた。

○ ケイトウ

JA共同育苗（お盆出荷作型用）の播種が例年通り3回に分けて行われ、「プリンスローズ」の育苗が今年より開始された。自家育苗のほ場では、育苗初期（5月上旬）の低温遭遇が原因と考えられる発芽不良・不揃いが発生した。定植は、例年通り5月下旬から6月上旬に実施された。6月後半以降、降水量が極端に少なかったことから、灌水不足のほ場では、草丈の伸長が抑制された。また、6月後半以降の日照時間が平年より長く、気温が高く推移したことから、開花が前進化する傾向が見られた。病害虫の発生は全体的には少なかったが、ヤガ類による食害、炭そ病等の病害が一部で認められた。

○ キク

主要なお盆出荷作型では、生育期前半に気温が一時的に低下した時期があったものの、生育は概ね順調に進んだ。但し、6月中旬の曇雨天の後の晴天・高温により成長点付近の葉先枯れが発生した。花芽分化・発達期にあたる6月下旬以降は記録的な猛暑となり、高温による開花遅延が発生した。彼岸出荷作型においても、8月以降も続いた高温の影響により開花が遅延した。病害虫については、褐斑病や斑点細菌病の被害が複数のほ場で観察され、特に彼岸出荷作型で発生が顕著であった。

○ シンテッポウユリ

今年も、お盆出荷作型用の「西尾3号」の委託生産苗が配布され、定植は4月下旬の適期に行われた。しかし、育苗期より葉枯れ病が発生し、一部のほ場では発生が広がった。定植後は概ね順調な生育であったが、梅雨明け（6月下旬）以降は高温乾燥が続き、灌水量が少なかったほ場では、草丈の伸長が抑制され、切り花の最上位階級（2L規格）の割合が少なかった。開花輪数については3～5輪が中心であったものの、1～2輪の少輪株の混在が目立った。

畜産

○ 酪農

酪農家戸数は12戸から2戸廃業したが、第三者継承による経営移譲により新規酪農家が1戸誕生し、11戸となった。出荷乳量は猛暑の影響もあり例年より若干の減少となった。

○ 自給飼料

イタリアンライグラス：収量は平年並みであったが、収穫時の天候に恵まれ、品質は良好であった。
WCS用稲：収穫時の天候不順はあったが、生育は良く十分な収量を得られた。

(2) 現地活動情報一覧

No.	情報テーマ	作成月日
1	J A福岡京築スイートコーン部会が県庁で販売促進活動	6/9
2	令和7年度新規就農者のつどいを開催	7/1
3	水稻の増収に向けた講習会を開催	7/3
4	苅田小学校の小学生が大豆について楽しく学ぶ	7/7
5	暑さに克つ米づくりを学ぶ	7/17
6	キウイフルーツ県産花粉の安定生産に向けて	7/16
7	担い手生産者の経営発展に向けた支援	8/5
8	系統栽培の省力化体系の確立に向けて	8/7
9	集落営農組織の組織間連携に向けた研修会を開催	8/19
10	大豆の講習会を開催	8/25
11	京築地域の未来を担う農家の育成を支援	9/3
12	築上町の下田芳樹氏が令和6年度福岡県大豆作経営改善共進会で優良賞を受賞	11/5
13	豊前市の河原田営農組合が令和7年度福岡県麦作共励会で優良賞を受賞	11/5
14	カキカラス被害防止に向けて	11/4
15	夏秋なす部会栽培技術研修会を開催	11/10
16	上毛町特産「川底柿」の消費拡大に向けて	11/11
17	新規就農者や女性農業者等の機械操作技術向上を支援	11/11
18	みやこ4Hクラブが「ふくおか農林水産漁業体験ツアー」で農業機械の操作体験や地域農産物のPRを実施	11/26
19	みやこ4Hクラブが産業祭で地域農産物のPR販売を実施	12/15
20	京築管内の4Hクラブ員がほ場視察会を開催	12/22

6 参考資料

No.	情報テーマ	作成月日
21	夏秋なす部会反省会を開催	1/16
22	就農相談・支援の極意を伝授	1/27
23	京築地区花卉生産振興大会が開催される	1/28
24	労働力確保に向けた新たな手法と制度を学ぶ	2/3
25	気候変動への適応に向けた研修会を開催	2/9
26	新田原地区の果樹産地を支える法人経営を支援	2/12
27	原価計算、押さえるべき費目は？	2/17
28	麦の収量向上に向けた現地講習会を開催	2/24
29	京築大規模土地利用型農業研究会の先進農家視察研究会を開催	3/3

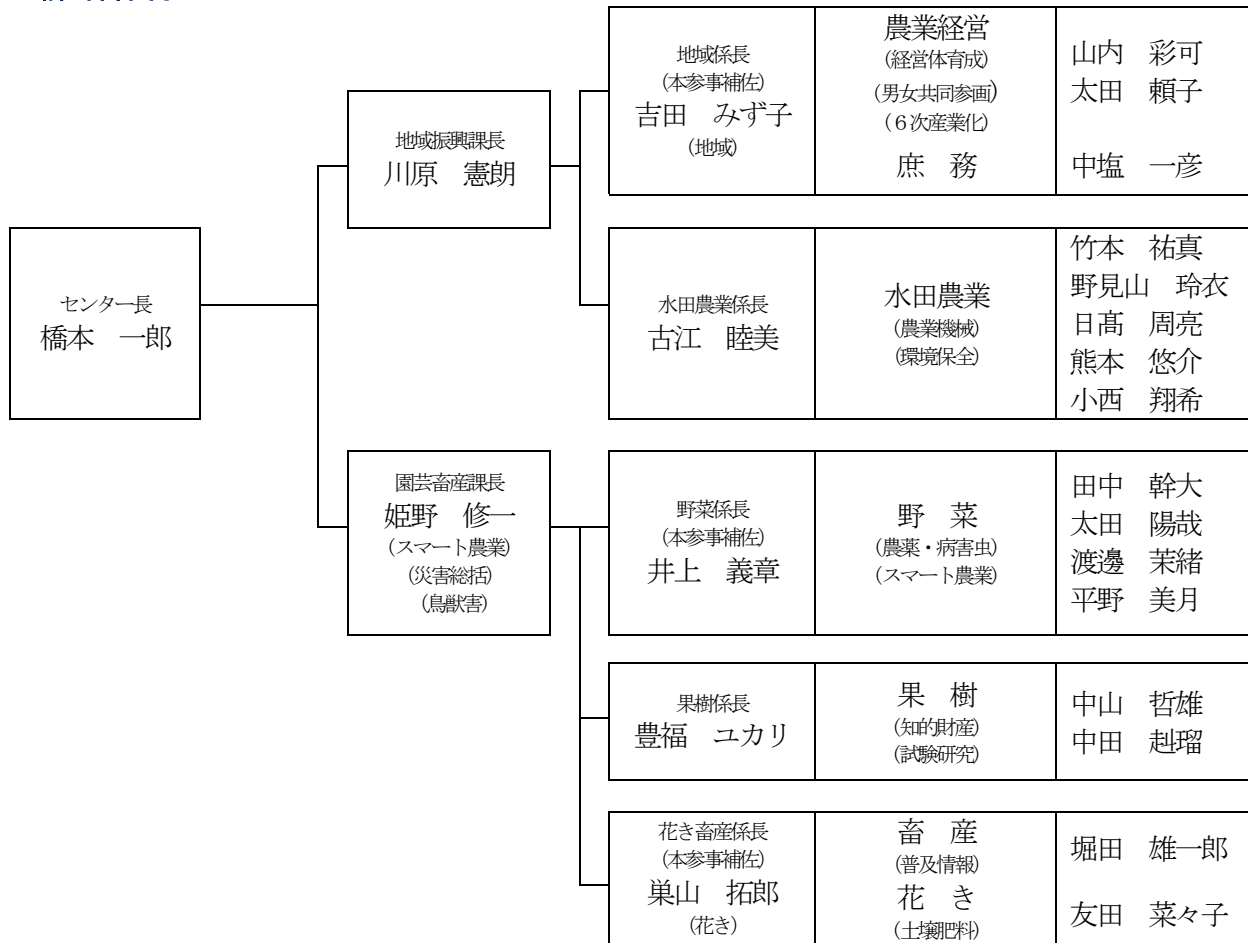
内容は、福岡県ホームページ「令和7年度京築普及指導センター活動情報」から閲覧できます。

<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/7keichiku-katudo-joho.html>



(3) 普及指導センターの活動体制

■課・係体制



■班活動の体制

○プロジェクト班

気候変動対策推進班	総括：姫野 推進員：井上 班員：古江、豊福、巢山、堀田、太田(頼)
-----------	--------------------------------------

○センター内運営事項における推進班

担い手確保・育成推進班	総括：川原 推進員：山内 班員：吉田、太田(頼)、古江、井上、豊福、巢山
農業青年等育成推進班	総括：川原 推進員：吉田 班員：竹本、小西、渡邊、平野、中田、友田
普及情報推進班	総括：姫野 推進員：堀田 班員：太田(頼)、野見山、太田(陽)、中山
経営体育成推進班	総括：川原 推進員：吉田 班員：姫野、太田(頼)、古江、井上、豊福、巢山
環境保全・食の安全推進班	総括：姫野 推進員：日高 班員：熊本、田中、中田

6 参考資料

○市町連絡会議等担当班

市町名	課長	地域係	各係・部門
行橋市	川原	太田	必要に応じ、市町連絡会議等の 会議へ参加
豊前市	姫野	吉田	
荻田町	川原	太田	
みやこ町	姫野	吉田	
吉富町	姫野	山内	
上毛町	姫野	吉田	
築上町	姫野	山内	

■普及指導センター職員



熊本

堀田 中山 日高 田中 中田 小西 太田(陽) 中塩 竹本
 野見山 山内 友田 平野 太田(頼) 渡邊 古江
 巢山 豊福 川原 橋本 姫野 吉田 井上

福岡県行政資料

分類番号 PA	所属コード 4703605
登録年度 07	登録番号 0001



福岡県行橋農林事務所 京築普及指導センター

〒824-0005 福岡県行橋市中央一丁目2番1号

TEL (0930) 23-4215 / FAX (0930) 23-8290

URL <https://www.pref.fukuoka.lg.jp/soshiki/4705401/>

E-mail keichiku-dlc@pref.fukuoka.lg.jp